

## CNAC 第6回全国フォーラム

「人と海とのつながり—それでも海から学んでいこう—」

日時 平成24年2月4日（土）13：00～17：00

場所 東京海洋大学・品川キャンパス（楽水会館）

### 基調講演「海と共に生きる」

NPO 法人 森は海の恋人 副理事長 畠山信氏

司会 それでは、続きまして基調講演に移りたいと思います。今回は、NPO法人森は海の恋人副理事長の畠山信様に基調講演をお願いいたしました。テーマはこちら、「海と共に生きる」ということでお話をいただきます。

講演の前に、まず私から簡単に畠山さんの略歴を御紹介させていただきます。1978年、気仙沼市生まれ。地元の高校を卒業後、C. W. ニコルさんが実習長を務められる専門学校に入学され、卒業後は鹿児島県屋久島で環境教育に携わられました。その後、帰郷され、カキ漁師として生活しながら、2009年に特定非営利活動法人森は海の恋人を設立されました。2011年3月、東日本大震災で被災され、全国各地から訪れる災害支援団体や、ボランティアの受け入れ調整に奔走されています。震災後も気仙沼の唐桑地区を中心に持続可能な地域づくりを目指されており、大変御多忙な中、本日のCNAC全国フォーラムにお越しいただきました。以上、簡単ですが、畠山様の御紹介をさせていただきました。

それでは、お待たせいたしました。畠山信様の基調講演です。

畠山様、よろしく願いいたします。（拍手）

畠山 御紹介ありがとうございます。宮城県の気仙沼から参りました畠山信と申します。きょうはどうぞよろしくお願いいたします。貴重なお時間をいただきまして、幾つか被災地の現状等を御紹介したいと思っております。

まずは、この中にもCNACの理事の方々を含め、あらゆる意味で御支援をいただき、心から感謝申し上げます。時間が余りないので、早速、発表をさせていただければと思います。

「海と生きる」。これは気仙沼市の復興のキャッチフレーズとして使われている言葉です。気仙沼市は漁村が多くありますので、海に関する仕事というのが非常に多々ございます。海と生きる。海の近くで、また海に関する職業をしている者にとっては、非常にぐっとく

る言葉なんですね。非常に意味が深いです。

私の本業はカキ・ホタテの養殖業をしております。それとともにNPO法人を2009年に立ち上げていろいろと活動をしていたんですが、昨年3月11日に大津波が来まして、家も仕事もなくし、また祖母も他界してしましまして、いろいろ打ちひしがれるかなと自分でも思っていたんですけれども、CNACの理事の海野さんや小池さんが酒と肉を持ってきてくださりまして、いろいろ励ましてくださりまして、せっかく何もなくなったんだから、ゼロからやることほど楽しいことはないんじゃないかなと思って、いろいろ活動を始めております。

「森は海の恋人」という言葉は、平成元年に生まれたものです。NPOとしては2009年に法人登記をしまして、活動を始めたんですけれども、その前身団体がありまして、森は海の恋人植樹祭というのを毎年1回ずつ、平成元年から継続して行ってまいりました。この森は海の恋人というのは、海と山はもともとつながっているものなんだよ、縦にずばつと切り離すものじゃないんだよというのを言葉にしたものになります。ねらいは、森と里と海、自然のつながりというのを感覚で持つ人材育成を目的に、いろいろ活動しております。

ここはしゃべらなくてはいけないところなので、余りおもしろくないんですけど、お聞きいただければと思います。

事業は、環境教育、森づくり、環境保全——環境調査ですが、この3つの事業を柱にして活動しております。

写真でいくとこんな感じです。子供のキャンプとか、なりわいが水産業なものですから、船も震災前は持っておりましたので、いかだに子供たちを連れていたり、そこでいろいろな体験的な活動をしつつ、森のほうに目を向けるという総体的な動きをしておりました。

その中から、2003年でしょうか、京都大学さんのほうで、世界初だそうです、森里海連環学という学問が起こされました。学問の世界も、しっかり縦に割られているということだそうです、例えば、水産学の先生は水産のことしか知らない。林学の先生は林学の専門ではあるけど、ほかのことは知らない。でも、自然というのはもともとつながっているもので、最近では法律もつながっている。つまり、人と自然のつながりが学問の世界でもあるんだよということで、横に横断する学問が起こされました。それが森里海連環学という学問だそうです。

結局のところ、人づくりになります。漁師が山に木を植えるという、森は海の恋人植樹

祭というのを毎年行っています。去年の6月、震災後に無理だなと思っていたんですけども、いろんな方々の御支援をいただきまして、じゃあ、ちょっと頑張ってみようかなと思って、植樹祭を行いました。背景の写真がちょっといっぱい見えませんが、ことしは1,200人ぐらいお越しいただいて、非常にありがたいな、元気づけられたなと思いました。

3月11日、一体何が起きたのか。私は漁師ですので常に海辺で仕事をしているんですね。このときはホタテやカキの出荷作業をしておりました。これは私の住んでいる唐桑町舞根、西舞根という集落の目の前の海なんですけど、もともと干潟ができる場所だったんですね。写真は、地震が起きている途中です。まだ揺れているんですね。揺れている段階から、潮の満ち引きが激しく始まりました。

私はどうしたかということ、船を守らなければいけない。船は買うと高いんですよ。なので、漁師にとって船がないと、本当に漁師として成り立たないものですから、命の次に大切な船を沖に出そうということで、出航しました。私は実は生き物が結構好きなものから、水産業をしながら、海の生き物がたくさん船に上がるんですが、変な生き物がいたら、ついつい写真を撮りたくなる。なので、常に胸ポケットに小さい防水のデジタルカメラを忍ばせていたんですね。なので、出航直後は、まあまあ大丈夫かなと思いつつ、自分の写真を撮りながら沖へ沖へと向かってまいりました。

沖に向かって、やたらエンジンの調子がいいから、まあ、何とか津波が来ても乗り越えられるかなと思っていたんですが、エンジンの調子がよいわけではなくて、実は引き潮に既に乗っていたんですね。なので、結構な速力が出ていたんですね。あるとき、この写真の左側、赤い灯台が途中にあるんですけども、海に瀬というか、岩があって、その上に乗っかっている灯台なんですけども、こちらまで差しかかったときに、どんどんどんその灯台が沈んでいくんですね。完全に沈んでしまいました。

そのときに、これは津波の第1波だということに気づいたわけです。津波の第1波は、瓦れきがほとんどないんです。第2波から、瓦れきが物すごく流れてくるんですけども、この後、ちょっと忙しくて写真を撮ることが残念ながらできなかったんですけども(笑)。船はひっくり返らなかったんですよ。ですが、かじが完全にきかなくなって。エンジントラブルですね。乗っていても、ただ漂っているプランクトン生活をしなきゃいけないという状態だったんですけども。しょうがないから泳ぐしかないの、3月、非常に寒かったんですけども、まあまあ、しょうがないや、泳ごうと思って泳ぎ出すと、非常に複

雑な潮の流れが静かな内湾でも起きておりまして、例えるならば、台風後の急流河川という感じでしょうか。至るところに小さな渦——川ではエディといいますけれども、そういうところができたり、陸と陸の間の中央部分は、陸地に向かって大きな潮の流れができ、かつ陸地に近いところ、およそ5メートルぐらいの幅だと思んですが、沖へ沖へ向かう流れができていたんですね。さらに、その上に表層だけ流れる複雑な潮の流れができて、非常にそこは興味深い、おお、こんなに変わるんだねという状態だったんですけれども。

船に乗っていたときはくるくる回転させられて、どっちがどっちだろうと方向感覚が完全になかったんですね。船から飛び込もうと思ったときに、ふと海を見たら、細い潮の流れがあったんですよ。それが、たまたま陸地をかすめるような感じで流れる細い潮の流れがあったものですから、これから外れなければいいかな、何とか陸地にたどり着けるかなと思って飛び込んで、頑張って泳ぎました。非常に寒かったですけれども。

その結果、泳ぎ着いたところがこの写真のところですよ。これは人のうちのお庭だったんですけれども、ここに水平に泳ぎ着いたので。この私の泳ぎ着いた瞬間から、引き潮がまた始まりまして、一気に潮がどっと引いていって、おお、危なかったという状態の写真になります。

おかのほうを見ますと、よく映像とかに出てくる、でっかい船が駅の近くに流れていたり。

これは私の自宅の跡です。基礎すら消えてしまいましたけれども。

これは、焼けただれた漁船が幽霊船のようにふわふわ浮いておりました。気仙沼は、ガソリンとか、軽油とか、灯油とかをためておくでっかいタンクが24基だったかな、流されたんですね。それに引火して、まさに火の海になったんですね。そういう映像がテレビで流れていたそうなんですけど、やっとな電気がついたのが2カ月ぐらい後だったものですから、私は全然そういう映像は見ていないんですけどね。こういう船に、でっかい漁船に引火して、燃え盛る漁船がいろんな港に入港してしまったんですね。なので、どんどん火事が広がっていった。こんな感じですね。マグロ漁船、はえ縄漁船、カツオ漁船。私が乗っていた船も夏に見つかりました。溶けていましたね。やっぱり火事になって——黒い煙が見えたので火事かなとは思ったんですけれども、まさか船が溶けるほどの熱ができるとは思いませんでしたけど。

近所に九九鳴き浜という鳴き砂の浜があるんですよ。そちらを見ましたら、とにかくいろんな瓦れきやら何やら流れ着いているわけですね。ここは、この地区に住む人間にと

っては、幼少のころだれしもが遊んだ場所、心のふるさとのような場所。本当に近くにあるんですが、アクセスが悪いために、船で行けば近いんですけども、歩くと結構遠いんです。そういう場所にあります。

こちらの理事の皆さんが、「よし、じゃあ、ここの砂浜をきれいにするか。おー！」みたいな写真になります。本当に全国からいろんなボランティアの方に駆けつけていただきまして、何とかきれいさっぱり瓦れきが撤去されました。

ただし、地盤がおおよそ80センチぐらいですかね、沈んでいるものですから、砂浜が出る時間帯が非常に少ない。ところが、砂は生き物なんだなと思いましたね。砂浜が山へ山へ移動していくんですよ。逆に砂浜の面積が広がったんじゃないかなというぐらい、砂浜が広がって。また、瓦れき等も本当にきれいになりましたものですから、この集落の方々から「ありがとうございます」と伝えてくれと、きのう出てくるときに仰せつかっております。

それと同時に、私は生産者ですので、今後この海で生産ができるのか、カキ・ホタテの養殖をして食っていけるんだらうかというところが、まず先に気になりました。もちろん気になったといっても、緊急性のところクリアした後というか、食い物が無い、飲み物が無いという状態から1つフェーズが上がって、とりあえず食い物も寝るところもある、じゃあ、これからどうしようというときになって、ふと落ちついたときに、生き物はどうなっているんだ、海はどうなっているんだということが大変気になりました。

支援物資のお話をすると長いんですが、いろんなおもしろい支援物資が届いて。そういう話をぜひしたかったんですけど、今回は海の話をしろということなので、交流会のときにでもお話ししようかなと思います。いろんな支援物資が来ましたよ。済みません。余り、まじめな会が苦手なもんですから、申しわけないです。

生物環境モニタリング調査と書いてありますけれども、いろんな大学の研究者の方々が、こちらのCNACの理事の方々と同じように物資を持ってきたり、ボランティアに来てくださったんですね。それこそ電気も水道も通るまで約2カ月ぐらいかかりましたので、燃料は基本的にはまきです。明かりはないのでろうそくで飯を食って。ろうそくのもとで飯を食うと、本物のやみなべというのを体験できるんですね。初めてやみなべというのを体験しました。本当に何を食っているのかわからないんですよ。電気が通じていないから、冷凍庫がどんどん解けていくわけですね。冷凍庫にあるものを全部なべにぶち込んでやみなべにしたんですけども、本当に何を食っているのかわからないんですね。

ごめんなさい、ちょっと話が……。申しわけございません。生物環境モニタリング調査の話ですね。

いろんな大学の先生方が、まさにまきを割りに来てくださったり、漁業資材の撤去とか、瓦れきの撤去に来てくださって、そういう方々とお話を——こちら側から、海の調査ができないか、水質はどうなっているんだ、海のプランクトンはどうなっているんだ、生き物はどう変わったんだというところを、まず知りたいというふうに強引にニーズを上げたという感じなんですけれども、それに呼応してくださった大学の研究者の方が、大体10大学ぐらいの研究者の方々が集まってくださりまして、「じゃあ、調査しましょう」と言ってくださったんですね。

これは調査風景になります。5月、本当は4月ぐらいからもう始まっていたんですけれども、正式に調査として始めたのは5月になります。水質、海底の泥、生物の3つです。

瓦れきの探査というのもあります。海に物すごく大量の瓦れきが浮かんでいたり沈んでいたりしていたんですね。私たち養殖をする者——養殖といっても、えさ拾いをやるわけじゃないんですけれども、カキ・ホタテの養殖をする場合は、いかだを浮かべなきゃいけない。いかだというのは、アンカーといって、でっかいおもりで固定されているものなんですね。海底におもりをおろしてロープを張って、それでいかだが流れないようにするものなんですけれども、いかりをおろせないんですね。下に何が沈んでいるかわからない。その調査もぜひお願いしますということで、これは首都大学の先生が来て、ソナーをかけて、どこにどんなものが何となく沈んでいるよというのを、国や県よりも早くして下さったんですね。完全にボランティアで研究者の方々は来てくださったので、動きが早いんですよ。横の動きというんですかね。縦の動きに比べて横の動きというのは物すごく早かったです。

いろいろ調査を開始しまして。調査のメンバーはこんな感じです。京都大学を初め、いろいろな大学の研究者の方々と、オーシャンファミリーの海野さんとかと一緒にしまして、これは去年の5月の海の底の写真です。5月ぐらいはどこの海底を見ても、1メートルぐらいの油の層がずっと海に沈んでいたんですね。本当に悲惨でした。

あとは、よくわからないふわふわしたものがすべてに降り積もっているという感じでしょうか。これはアカモクというホンダワラの仲間で、海藻の上に何だかよくわからないのが積もっている。この何だかよくわからないふわふわしたものを分析してみると、まあ、いろんなものですね。粒子——土や岩の細かいものと、油と、生き物の死骸だったり、か

けらだったり、ありとあらゆるものがまざったものが、ふうわり降り積もっておりました。

海底も見通しが悪いですね。ここはまだ油の層が比較的薄いところですが。しかし、泥をすぼっと引き抜いてみると油臭いんですね。そういう化学的な汚染も大変気になりました。これは何だかよくわかりません。何か嫌気性のバクテリアの塊みたいなものではないかということで、これもサンプリングをして分析をかけているんですが、まあまあ、たまにはこんなことも起きるよねという、バクテリアが大量に発生していた状態です。

7月に、ダイビング機材を仲間が担いで来てくれまして、潜ったら、やっぱり濁っているんですね。この濁りの質が変わったんですね。7月ぐらいだと、この濁りはほとんどプランクトンです。カキやホタテのえさになるものです。油の層はどんどん減っていくんですよ。どんどん減って、結局、見た目にはなくなりました。なくなったけれども、海の底の泥をすぼっと引き抜いてみると、いまだに若干油臭いなという感じはしますが、5月、7月ほどの油臭さはないです。自然分解するそうなんです。バクテリアの研究者の方に聞いたら、そういうバクテリアがいるそうで、どんどんいなくなっていくんです。ただ、海底にはやっぱり瓦れきが……。いすが突然沈んでいたり。

9月ぐらいになると、透明度がぐっと増すんですね。ホンダワラに付着していたあのふうわりとしたものはほとんど消えました。別に何をしたわけじゃないんですけども、自然に浄化していったということだそうです。魚の稚魚も大量にわいたというか、発生して、「海ってすごいな」と感動しております。アマモ場ですね。アマモもすごい勢いで回復していくんですね。ナマコも元気いっぱいのおうちをぶりぶりと。「わあ、すごい。立派なものなんだな」と。

これは先月1月、ちょうど調査をしたときの写真になります。漁師ですので、カキの養殖作業も同時に進めていたんですけども、とにかくいかだをつくる材料がなかったんですよ。いかだの材料というと、いかだもいろんなタイプがあるんですけども、杉の間伐材を使ったいかだ、竹を使って組んだいかだ、あとはロープを使ったいかだと、おおよそこの3つに分かれるんですが、例えば、杉の間伐材でいかだを組む場合、6寸とか7寸の長いくぎを使うんですよ。くぎがないんです。日本全国からくぎが消えたんですね。いろんなところで使われていたんでしょう。特にいかだをつくるくぎというのは若干特殊で、ドブ漬けというんですかね、亜鉛メッキされたくぎじゃないと、すぐ朽ちてしまうので、普通の鉄のくぎは使えないんですね。しかも、6寸とか7寸または8寸とかになると、かなり大きなくぎですので、知り合いを頼って、またいろんな支援団体の方々が来ていたの

で、「済みません。くぎはないですか」と聞きまくって、何とか九州のほうからくぎを送っていただくことができて。

また、杉の間伐材はボランティアの方々の力をおかりしまして、自分たちで切り出しました。なぜなら、道路が完全に開通していなかったので運べないんですね。なので、海べりに生えている若い杉を切って、そういう作業もずっとして、何とかいかだを設置することができたんですね。

カキの養殖というのはカキの稚貝、小さい赤ちゃん、カキの赤ちゃんを買ってくるところから始まるんですよ。カキの稚貝はどこで売っているかという、スーパーではなかなか売っていないんですが、宮城県の石巻というところが世界でも有数の大産地なんですね。カキの稚貝は、通称カキの種というふうに呼んでおります。柿の種ではありませんよ。(笑)ありがとうございます。やや受けですね。

このカキの種を海にぶら下げたら、まあ、この成長スピードの速いこと速いこと。昔から津波の後には、カキのおがり——成長ですかね、成長が早いと言われていたので、それは早いだろけど、こんなに早いとは本当に思いませんでしたね。びっくりするスピードで成長していきました。成長する理由としては、海が攪拌されて、深層水と、表層のどちらかという貧栄養系の水がうまくまざったり、または、いかだの台数が非常に少ないものですから、カキのえさのプランクトンをほとんど独占できてしまうところから、成長が早いというふうになったと思います。

このカキは、余りにも成長がいいものですから、次の津波がもし来る前に売ってしまったほうがいいんじゃないかという話にもなって(笑)。実はおとし、2010年にも津波があったんです。チリ地震津波ですかね。チリのほうで地震があつて、そこからどっと太平洋を渡って津波が押し寄せまして。そのときも、いかだが半分ぐらいですかね、流されてしまったもので、ちょうど去年、ことしこそはと思って、そのときにあわせてホタテやカキをしっかり借金をして仕込んだんですが、3月11日ですべてが消えたという、漁師としては物すごくがっかりするタイミングだったんですね。ただ、このカキの成長を見ていると、やっぱり海というのはすごいなと本当に日々感動しております。カキだけじゃなくて、ほかの生き物も物すごいです。

海の底を、小さいトローリングというんですかね、底引き網みたいな調査用具があるんですが、あそこに持ってきてもらって引いたら、カレイの稚魚が、魚が本当にいるんだねと。去年の4月、5月は本当に死の海でしたからね。エビすらいない。全く見るのがな



かった。ウミタナゴという魚がいるんですけれども、ウミタナゴがすごくたくさん木にひっかかっているんですよ。だから、木で成長するのかなという感じで。ウミタナゴとか、カキとか、ホヤとかが、陸上の木になっているんですね。みんなそこに持ち上げられて、死んだんじゃないかなと思ったら、やっぱり強いんですね。これはイカの赤ちゃんですね。こんなのも藻場を底引き網で軽く引くとたくさんとれました。

この写真の人たちは何をやっているかという、地盤が沈んでしまったものですから、干満にさらされる場所がふえたとしてもいいでしょうか、これはもともと車道だったんですね。車が通る道だったんですけど、今ここは干潮のときすら通れない、壊れかけているもので、海べりの道はちょっと危ないかなと。かわりに迂回路ができていますので生活には支障はないんですけれども。

このあたりで何をやっているのかという、実はこんなところのコンクリートの上に砂利がたまっている場所とかがあるんです。ここの砂利をよくよく見ると、何と、先月、震災後初めてアサリの稚貝が発見されました。すごいですね。こんなところにいるんですよ、アサリが。

アサリはここを完全に干潟と見ているんですね。こういう場所を。どこまでいるんだろうなと思ってどんどん調べていったら、結構どこでもいるんですね。本当に感動しました。もともと結構広い干潟ができる場所だったんですが、震災で干潟ができなくなったんですね。地盤が沈んだので潟にならなくなった。そのかわりに、こういうところにアサリの稚貝がひっかかって、びっくりしました。これは直径2ミリです。ただ、2～3ミリのときは白いんですね。白いので、手に砂利を握って手のひらで見ると、白いところが目立つので、「アサリの稚貝、発見」と、すぐ見つけられるんですよ。10分ぐらい探していると、結構たくさんとれます。

地盤が沈んだ影響で、海と陸の境目が大分変化したんですね。これは私の住んでいる集落です。私は、家は流されましたけど、実家だけがちょっと高台にあったので、そこで今、肩身狭く過ごさせていただいているんですけれども。こういうふうに地盤が沈んで、海と陸の境目があやふやになった。あやふやになると、いろんな生き物が生えてくるんですね。魚類で一番早かったのはボラです。ボラは最強です。川を埋め尽くすボラの稚魚。5月半ばには5センチぐらいのボラの稚魚が、「ボラが復活したんだ。すごいな」と思っていたら、それが大量に発生したんですね。写真の向かって左側は川なんですけれども、本当に川が真っ黒になるぐらい、たたいてとれるぐらい、ボラが繁殖してしまいました。いつかまと

めて食ってやろうと思っているんですけども。

地盤沈下によって湿地も形成されたんですね。私の集落、西舞根という地区なんですけれども、湿地もできたし、いそもできたんですね。干潟も何となく形成されている。この集落に住んでいる長老たちに、「結構地盤が沈んで大変だ」という話をしたら、「何を言う。昔の地形に戻っただけだぞ」と諭されました。昭和初期は何となく湿地が多かった場所だったそうです。それを埋め立てて工場を建てたり、家を建てたりしていたので、「おお、懐かしい。何か昔に戻ったみたいだな」というぐあいで話されたんですね。

こんな形です。結構至るところにこういうじめじめした場所ができて、ここはもともとは放棄された水田跡だったんですけども、海のすぐ横にあるんですが、ここが淡水と汽水と塩水——海の水、その3つぐらいにきれいに分かれる感じの湿地ができそうなんです。生き物好きとしては、もともと陸地だったところに海の生き物が入る瞬間に立ち会いたいんですね。もちろんここも継続して調査をこれからしているんですけども、今のところまだ海の生き物は入り込んでいないです。ボラは、これは川の水がオーバーフローしてこういうところに入っていくので、そのオーバーフローした川の水に乗かって、ボラや、ことしの秋はサケも上りました。どっと入っていったんですね。この中でサケが大量に泳いでいるという不思議な……。泳いでいるというか、苦しんでいるという感じでしたけれども。ここはまさにそういう稚魚がたくさん入っていったので。

ベントスはまだですね。ゴカイとか、カレイとか、底ものと言うんでしょうか、下にいる生き物はまだ一切入っていないんですけども、せんだって12月ぐらい、ここに白鳥が落ちてきました。白鳥といえば、上から見ていると水がある場所がわかるんでしょうね。間違えて白鳥がえさ場に落ちてきたという感じでしょうかね。サギの仲間も大量にこの辺でえさを食べています。えさというか、ボラを食べています。ほぼボラです。

こんな感じです。川がオーバーフローして、海の水が川を上ってどんどん低いところに浸水していくんですね。または、排水口から逆流してどんどん海が広がっていくというか、湿地が広がっていく状態です。

ここをうまく活用できないかなと。これは比較した写真ですけども、左が干潮、右が満潮のときの写真です。ほうっておくだけで結構いろんな水辺ができていくんだなと。

これはサケが秋に上って、川で亡くなって、ヤドカリ君に食われまくっている。ヤドカリやツルがたかって食っている写真になります。

写真としてはここまでで、ちょっとまとまりのないお話だったんですけども、被災は

しましたし、津波は怖いなというのも経験しましたけれども、我々海の民は——海の民というか、海でなりわいをしている者にとっては、別に津波を恨んでいるというわけではないんですね。それは震災当時から、別に津波は来るものだから恨んでもしょうがないというのはあるんですけども、海が悪いわけでは決してないですよ。なので、津波は来るものだという認識で、死なない程度に生き残るすべを身につけることがこれからは重要なんじゃないかなと僕は考えています。

ここで言っているかどうか、わからないんですけど、防潮堤の話が非常に問題になっておりますね。気仙沼市としては海と生きるというキャッチフレーズをつけたぐらい、いろんな話を聞いてみますと、もともとそんなものはなかったんだから、別につくる必要はない。防潮堤をつくるぐらいだったら防災教育に力を入れるべき、または避難ルートをしつかりと確保すべきだと僕は思います。同じ意見の方は恐らくこの中にもいらっしゃるでしょうし、気仙沼市民の多くはそう思っている方が結構多いですね。

ただ、日本というのは談合で育ったというか、土建国家なので、利害関係が絡むとそちら側に流れる感じではあるんですけどもね。見ていると、防潮堤をすぐつくろうというまちも近くに確かにあるんです。そういうところを見ていると、また地元の方々に話を聞いていると、公共事業にぶら下がって生きようとする方がいらっしゃるんですね。すると、新しく仕事をつくろうという、自分でクリエイティブな発想が生まれなくなって、本当にサラリーマン化というか、自分で考える力がどんどん衰えていく人たちのように僕には見えます。

僕はどっちかという、いい意味ではクリエイティブという言葉を使ってしまいますけど、仕事は自分でつくるものだと思っていますので、せっかくハードが全部消えて、いいも悪いもそこにはない状態なので、新しくつくるのであれば、いいものをやっぱりつくりたいじゃないですか。すばらしい継続的な地域、まちをつくっていきたくないと僕は考えております。

そのためには、僕1人では何もできないんですね。物理的にも無理ですし、今も失業中と言うと変で、漁師に失業もくそもないんですけども、お金がないものですから何もできない状態ではあるんですけども、ただ、震災後に本当に信頼できる仲間がふえた、ここは本当にうれしいです。今、特に外部から入ってきている人たちは、震災関係の復興ボランティアとか、NPOやNGOで入ってきている団体の方々は、非常に優秀なんですね。僕の知らない——僕の知らないというか、僕が知らないだけなんですけれども、社会のシ

システムをたくさん知っていたり、いろんな流通のシステムを知っていたり、また海外とのコネクションの流通のシステムを知っていたり、そういう仲間と今プロジェクトを実はやろうとしております。

継続的な地域づくりを、勝手に仮称としてボレロプロジェクトと言っていますが、名前に意味はありません。ボレロというのは、ただ単に僕がボレロが好きだけでつけた名前なんですけれども。みんなで第九みたいな感じで、ボレロみたいな感じで、初めは何かざわざわやっているけれども、だんだん盛り上がっていこうぜというのをつくっていきたい。

まず震災後の自然を生かした地域環境を整えたいんですね。下手に人工物をどんとつくるよりは、せっかくないんだから、しかも、どこにもお金はそんなにないんだから、要らないものをつくらないでいいんじゃないか。自然のままそれを逆にモニタリングしていこう。どう変化していくのか。変化していくのを、データをしっかりとっていこうというのを1つやっていききたいんです。

それと、子供の居場所づくり。これはぜひともやらなければいけないところです。気仙沼市の学校の校庭には、ほとんどの学校の校庭に仮設住宅ができて、子供たちがはっちゃんける場所が非常に少ない。また、子供は子供なりにだんだん瓦れきの中で遊ぶようになってきているんですが、子供も生き物だから強いなというところはあって、弱いのは大人だけかなというところもあるんですけれども、どんどん子供の自然離れが進んでいくんじゃないだろうか。逆に、親御さんが、「海は危ないから行くな。海は危険なところだ。水辺には近寄るな」というふうになってしまうんじゃないかというのが、非常に危険なところですよ。

日本というのは本当に海に囲まれた島で、海と遊んでいないと僕は津波からは逃げられなかったですからね。船で沖に出て津波の第1波を食らって、ふと見たときに、潮の流れが見える。これは僕の幼少のころの自然体験が物を言っているんじゃないかなとは思っています。やっぱり海で子供のときは遊ぶじゃないですか。服を着たまま泳いだりするわけですよ。着衣泳を既に実践しているんですね。潮の流れも、川で遊んでいけば、水の流れは見えるじゃないですか。水がたまる場所もある。たまるというか、流れていかずにとどまる場所もあるわけじゃないですか。それは教えてもらうのもいいけれども、自分の感覚でそれを知っていないと、どう体を動かしたらいいとか、そういうところが見えないと思うんですね。なので、子供の自然体験、幼少のころの自然体験というのは防災教育につながると感じています。

それと、大人の面に関してなんですが、ちょっとやりたいことが幾つかあって、雇用はなかなかないんですね。貧困というのは地域の荒廃になりますし、非常に危険なことにもなりかねませんので、やはり雇用をつくらなければいけない。地酒をつくりたいんですね。できればウオッカがいいな。何でウオッカかというと、カキとウオッカを合わせるとオイスターショットという食べ物、カキ料理ができるんですね。小さいショットグラスに生ガキの小さいのを何粒か入れて、上からウオッカを注いで囲むというもので、非常においしいです。それが食えるオイスターバーが海べりにほしいなど。

さらに、食品の薫製づくりをこれから……。既に少しずつ始めているんですけども。薫製というのはうまいですよ。結構頑張ればちゃんとうまいものができてしまうんですね。それを雇用につなげていける、地域の産業につなげていける。

あとは、集団移転に関する住居、家を建てなければいけないので、それはできれば地元の材を使いたいんですね。地元の間人だけで建てられたいんじゃないかなと勝手に……。

済みません。今出ているのは私の妄想だと思ってください。妄想だけれども、いろんな仲間と一緒に動いていたら、特にいろんな団体と絡んでいるんですけど、Civic Force という団体があるんですけど、そこのスタッフの方が非常に優秀なんですね。「じゃあ、一緒に地域づくりをやりませんか」と言ったら、「おお、いいですね」みたいな感じで、とんとん拍子で。「じゃあ、継続的なまちがいいよね」と。

やっぱり若手が動かないとだめなんじゃないかなと僕は思いました。地元の若い連中というのは少ないですけども、でも、いる人間、または外部から入ってくる人間も巻き込んでどんどん復興をこれから進めていきたいと考えておりますので、このプロジェクトだけじゃなくても結構です、ほかのことで何でも結構ですので、つながり合えて一緒にできることがありましたら、ぜひお声がけいただきたいな、または協力していただきたいなということをごちからでも発信していこうとは考えております。

ちょっと時間がオーバーしておりましたが、これで私のお話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 畠山様、ありがとうございました。

またこの後、パネルディスカッションでもお話しいただけるとのことですので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、パネルディスカッションに移る前に、ここで10分、休憩を挟みたいと思いま

す。14時45分からパネルディスカッションを行いますので、それまでに会場にお戻りください。

では、休憩にさせていただきます。